

アトモスフィア

研究者のモラルとは

宮城 妙子*

外来語のモラルは、道徳、倫理、良識などで表現されるが、一般社会では、これら各々の日本語では網羅できない広い意味で、しかも曖昧さも残るかたちで使われている場合が多い。人生や社会に対する考え方や態度ともいうべきもので、自身に対して自発的に与える規範がその態度に反映される。経済的・精神的疲弊が問題視されるこの現代社会において、様々な困難に立ち向かいつつ、生きて行かなければならない状況で、個人によって、また所属する社会あるいは国によって、そのモラルの内容は異なってくるのは当然である。

ここで、研究者としてのモラルを考えると、具体的にはどんなことが関わってくるのであろうか。長い研究生生活を送っていながら、近年、やっと遅まきながら、それを考えさせられる機会があった。研究者もまた、研究生生活において、自身のモラルによって、自身の人生での生き方と密着させて、それをしっかり反映させながら研究に携わる必要があること、しかし、それが研究社会ではそれほど容易ではないことに気がついた。これから活躍する若い研究者がさらに充実した研究生生活を送るために、少しでもこの拙文が参考になれば幸いである。

研究者は、いうまでもなく、成果の発表、共同研究の遂行等を通じて、自身が積み重ねて来た知識と努力の賜物である研究成果の評価を受ける。基礎研究では、オリジナリティとプライオリティを兼ね備えた成果が高く評価され、また、応用研究も産業や社会の発展のために具体的な発展が得られたとき、それは研究費の配分や昇進、常勤職の獲得等に繋がる。このような、いわゆる成果主義は、ある意味では理解し易く、他の社会での評価よりも曖昧さが入る余地は少ない。しかし、ここにもしばしば不公平や判断ミスが入る。所詮、すべて人間の技であるので、当然であると言える。とくに、この社会では優れた成果を上げるためには、研究費獲得等によって常に研究条件の改善をめざさなければならず、しかも、どの社会にも該当することではあるが、名利が目の前に突きつけられ、誘惑が少なからず多い。天才的な研究者には当てはまらないかもしれないが、普通の研究者の場合は、思考法や実践力にそれほど格差がないので、常に様々な競争の場に立つことになる。ここに、しばしば問題視されるデータの捏造が起こる。自身の研究条件の改善を急ぐあまり、また、名利に、より強く捉えられることによって、不正の土壌が培われる。しかし、自分の行なった実験結果を批判的に吟味する姿勢を失ってはならない。その成果の新規性が高いほど、研究者は孤独を感じるが、じっとそれを静かに検証する勇気と忍耐力が必要であろう。データ捏造などという問題まで至らない日常の研究生生活においても研究者に対する誘惑は少なくない。常に競争的思考が働かざるを得ない研究分野においては、他の研究者との競合等において、精神的軋轢が生じる可能性もある。例えば、時間と労力をかけて作成した自分の大切なサンプルを共同研究関係にない他の研究者に譲渡したりする際などにもこれらの誘惑が生まれる。自分の成果に直接結びつかなくとも、自分が持っているもので、最も良いものを渡すことが常にできるであろうか。相手の身になって考えてみればわかることではあるが、そこにもその研究者自身の生き方が関わってくる。また、それが自身のことのみにとどまらず、共同研究者の利害が関わる研究においては、それほど悠長にしては居られない。そこに関わるすべての研究者の利害を憶測し、総合的にできるだけ正しい視点から適切な判断を下さなければならない。人間としてのモラルが大いに発揮されなければならない局面である。

現代社会においては、多忙で緊張が多い研究生生活を送りながら、研究の仕方と生き方が離反してしまいがちになるものである。真理に対して謙虚な姿勢を保ちつつ、質の高い、社会に役立つ研究をすることによって、自身の生き方を豊かに表現して行ける研究者は、さぞ人間としてもすばらしい人生を歩んでいるにちがいない。

*東北薬科大学分子生体膜研究所教授、本会元理事